

児童用学校生活の質(QOSL)尺度の作成

井場朱紗美

玉木健弘

樋町美華

福山大学大学院人間科学研究科 武庫川女子大学文学部心理社会福祉学科 福山大学人間文化学部心理学科

キーワード：児童，学校生活の質，尺度の作成

はじめに

近年教育現場では、いじめや不登校、学習意欲の低下などが問題となっている(田中・高木, 2004)。これらの問題は複雑であり、学校要因のみで説明することはできない。しかしながら、児童が長時間生活する環境である学校を取り上げ児童の学校生活を明らかにすることは、極めて重要なことであると考えられる。

児童の学校生活を対象とした研究は数多く存在するが、その多くはいじめの発見、学校享受感、学校適応などが基準となっている(古市・玉木, 1994 ; 河村・田上, 1997)。さらに、それらの研究で使用される尺度に関してはTable1に示すように、項目数が多く、ネガティブな項目も含んでいるなど児童が回答をする際に抵抗があると考えられるものが多い。そのため、児童の学校生活全体を測定できているとは言いがたい。そこで、本研究では児童の学校適応ではなく、学校生活を把握する概念として学校生活の質(Quality Of School Life: QOSL)に焦点を当てる。

Table1 小学生を対象とする学校生活に関する質問紙概要の一覧

質問紙名	作成者	作成年次	対象	質問項目数	回答方法	信頼性	妥当性	因子構造	印象	学校生活を測定
学校生活の質チェックリスト	表・繪内・宮前	2008年	小4~小6	18項目	4件法	△	△	4因子	P	○
学級満足度尺度	河村・田上	1997年	小4~小6	12項目	4件法	○	○	2因子	N	×
学校生活享受感情測定尺度	古市	2004年	小5~中2	13項目	4件法	○	×	1因子	P	×
学校適応傾向測定尺度	古市・玉木	1994年	小5~中2	28項目	4件法	○	×	4因子	PN	○
学校生活適応尺度	田邊・織田	2001年	小6	41項目	5件法	×	×	10因子	P	○
学校環境適応感尺度	舟木・熊谷	2005年	小5	21項目	4件法	×	×	5因子	P	○
学校生活スキル尺度	山口・飯田・石隈	2005年	小5, 小6	59項目	5件法	○	○	7因子	P	×

○：できている，×：できていない，△：検討されているが不十分
P：ポジティブ，N：ネガティブ，PN：ポジティブ・ネガティブ両方

QOSLはWilliam & Batten(1981)によって提唱された概念であり、彼らはQOSLを「生徒の前向きな経験に関する学校生活の全体的な満足感」と定義している。さらに、QOSLは生活の質(Quality Of Life: QOL)のより広い概念ともされている(Malin & Linnakyala, 2001)。また、Mok & McDonald(1994)によるとQOSLは、「学校要因」「児童・生徒要因」に分類可能であるとされている。「学校要因」は授業などのカリキュラム、学校の雰囲気、教師との関係によって構成され、「児童・生徒要因」は学生らしい経験、友人と関係、児童・生徒自身の個性から成り立っている。

そのQOLの研究において、従来から指摘されているのは、自己への認識が挙げられる。これはQOSLにおいても同様で、大学生を対象とした研究ではあるものの福盛・峰松・馬場園・一宮・永野・藤野・上園(2001)や村上(2004)では尺度項目に、自己意識に関する項目を含み研究を行っている。さらに、Malin & Linnakyala(2001)の研究で使用されているQOSL尺度にも自尊感情の項目が含まれている。また、粕原・河村(2002)によると、学校生活不満足群の自尊感情は学校生活満足群より低いことが示されており、自尊感情が学校生活に大きく影響を及ぼすことを明らかにしている。すなわち、自尊感情の低くさは、児童の深刻な学校不適応感を招く要因になると考えられる。このことから、自尊感情はQOSLにおいて外すことのできない概念であると考えられる。

また、QOSLを捉える上では、児童が学校生活の中で最も長く過ごす学級の雰囲気も重要である。仮谷園・西(2003)は「児童の学校・教室のイメージには、学校に対する児童の心理特性が確実に投影されている」と述べており、児童の学校適応を把握するための指標として有効であるとしている。さらに、伊藤・松井(2001)は、学級風土という概念を利用することで、児童・生徒たちの実感と、教師が日ごろ感じている学級像との比較が可能であり、新たに導入した指導や介入の成果を学級風土の変化から査定可能であると述べている。このように、学級の雰囲気を取り入れることにより、児童一人一人の学級に対するイメージも把握することが可能となる。

しかしながら、これまで述べてきた自尊感情と学級の雰囲気だけではQOSLを捉えるには限界がある。適切にQOSLを捉えるためには、従来の学校生活を対象とした尺度に多く含まれている、「教師関係」、「友人関係」、「学習意欲」の三つが必要となる(表・繪内・宮前,2008)。平成19年度の文部科学省(2007)の「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」によると「教師関係」、「友人関係」、「学業不振」の3要因が不登校と深く関わっていることが報告されている。さらに、嶋田(1998)や古市・玉木(1994)の研究においても、「教師関係」、「友人関係」、「学習意欲」は学校生活の把握に重要な位置を占めている。このことから、児童の学校生活を捉える尺度作成において「教師関係」、「友人関係」、「学習意欲」は外すことのできない概念であると考えられる。

これまで述べたように、児童のQOSLを捉える上で重要だと考えられる概念は存在するが、それらを同時に測定できる児童用のQOSL尺度は、表ら(2008)の学校生活の質チェックリスト(小学生版)以外にはない。しかしながら、表ら(2008)によって作成された尺度は、最終的な質問項目での信頼性は検討されておらず、妥当性の検討も発達障害をもった児童のみを対象に行われている。よって、この尺度の信頼性・妥当性の検討は十分であるとは言いがたい。そこで、本研究では信頼性・妥当性を備えた児童のQOSLを適切に測定するための尺度の作成を試みる。その際、QOSLを「学校生活を構成しているものに対する個人の肯定的な認識」と定義し、先行研究によって示されている学級風土の質(Quality of classroom climate : CQ)、友人関係の質(Quality of relationships with friends : FQ)、教師関係の質(Quality of teacher relations : TQ)、学習意欲の質(Quality of greediness for learning : LQ)、自尊感情(self esteem : SE)の5つから構成されるものと仮定する。児童を対象とした尺度は、先のTable1に示すように4年生から6年生が主流であるため、本研究では対象を4年生から6年生に設定する。

研究1

1. 目的

設定したQOSLの定義に添い、CQ、FQ、TQ、LQ、SEの5つの構成概念からなる尺度を暫定版として作成することを目的とした。

2. 方法

2-1 項目の作成 項目は、先行研究において使用されている尺度を参考に調査者が作成した。さらに、心理学専攻の大学生7名と心理臨床学を専攻する大学院生3名にQOSLの定義を説明し、研究趣旨を理解してもらった上で、項目として適切かどうかの判断、修正を求めた。その結果、30項目のQOSL尺度の原案が作成された。

2-2 調査対象 小学4年生～6年生3学級83名(男子55名、女子28名)

2-3 調査期間 2009年2月上旬

2-4 教示 「次のページにある文章は、あなたの学校での生活にどれくらいあてはまりますか。自分の気持ちにあっているとと思うところに1つだけ○をつけてください。」と教示した。

2-5 回答方法 「よくあてはまる(4点)」、「すこしあてはまる(3点)」、「あまりあてはまらない(2点)」、「まったくあてはまらない(1点)」の4件法で回答を求めた。

2-6 手続き クラスごとに担任教師から配布してもらい、回答を求めた。

3. 結果および考察

3-1 QOSL 尺度(暫定版)の因子構造

QOSL 尺度(暫定版)の因子構造を明らかにするため、統計ソフト SPSS を用いて探索的因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った。スクリープロットの形状から、5 因子構造が妥当であると判断し、再度因子分析を行った。因子抽出の基準は先行研究を参考に、固有値が 1 以上で因子負荷量が 0.4 以上のものでかつ 2 因子にまたがって 0.4 以上を示さない項目で構成されるように設定を行った。その結果、CQ、FQ、TQ、LQ、SE の 5 因子 24 項目を抽出した。FQ のみ 3 項目であったことから、因子ごとに負荷量の高い上位 3 項目を抽出し、最終的な項目を決定するため、改めて因子分析にかけた。その結果、5 因子 15 項目を QOSL 尺度(暫定版)と決定した。

3-2 QOSL 尺度(暫定版)の信頼性および妥当性の検討

信頼性の検討を行うため、Cronbach の α 係数を算出した結果、尺度全体では $\alpha=.90$ という値が得られた。さらに各因子ごとに算出したところ、比較的高い数値を得ることができ、十分な信頼性を有していることが確認された(TQ : $\alpha=.93$, SE : $\alpha=.84$, CQ : $\alpha=.86$, LQ : $\alpha=.84$, FQ : $\alpha=.80$)。

妥当性については、事前に行った学校長からの聞き取り調査によって「5 年生は問題を抱えている学級である。」ということが明らかになっていたため、性×学年の 2 要因の分散分析を用いて検討した(Table2)。

Table3 学年と男女別によるQOSL尺度の因子別平均値(SD), 及び2要因の分散分析

	学年					主効果		
	4年生 (N=24)	5年生 (N=31)	6年生 (N=28)	男子 (N=55)	女子 (N=28)	性	学年	交互作用
学級風土の質 : CQ	16.79 (2.53)	13.10 (3.34)	18.18 (2.35)	15.64 (3.64)	15.64 (3.64)	1.40	19.37** 5年生<4年生,6年生	0.37
教師関係の質 : TQ	17.83 (4.30)	9.87 (4.33)	14.21 (4.40)	13.02 (5.01)	15.21 (5.72)	6.81* 男子<女子	26.80** 5年生<4年生,6年生	3.71*
友人関係の質 : FQ	10.13 (1.99)	8.87 (2.47)	10.18 (2.02)	8.98 (2.30)	8.98 (2.30)	18.84** 男子<女子	2.23	2.01
学習意欲の質 : LQ	13.17 (2.17)	9.94 (2.99)	11.43 (2.32)	11.05 (3.04)	11.05 (3.04)	2.45	8.93** 5年生,6年生<4年生	0.84
自尊感情 : SE	14.75 (3.17)	10.55 (2.76)	13.21 (3.32)	12.38 (3.55)	13.21 (3.43)	1.78	12.33** 5年生<4年生,6年生	0.59

* $p < .05$ ** $p < .01$

その結果、学年の主効果では全体的に他の学年よりも 5 年生が有意に低い傾向であった(CQ : $F(2,77)=19.37, p < .01$, TQ : $F(2,77)=26.80, p < .01$, LQ : $F(2,77)=8.93, p < .01$, SE : $F(2,77)=12.33, p < .01$)。この結果から、本尺度は学級の状態を把握するのに役立つ、日頃教師が感じている学級の状態を客観的に捉える事ができ、臨床的妥当性

も有していることが明らかになった。また、性の主効果ではTQ, FQにおいて男子よりも女子が有意に高かった(TQ : $F(1,77)=6.81, p<.05$, FQ : $F(1,77)=18.84, p<.01$)。庄司(1991) や山口・飯田・石隈(2005)から社会的スキルや学校生活スキルは男子よりも女子が高いという結果が一貫して得られている。対人関係の得点が高かったという本結果はそれと一致するものであり、作成した尺度は一般的に言われている児童の対人関係の傾向を捉えることが可能な尺度であると言える。

研究2

1. 目的

研究1で作成された尺度の改良を行うため、対象者数を増やし、信頼性、妥当性を再度検討する。基準関連妥当性には、学級の状況が客観的に捉えられているかを測定するために担任教師に対するアンケート調査を用い、構成概念妥当性検討として、谷・山崎(2004)が尺度作成の際に用いた児童ノミネート法を使用する。

2. 方法

2-1 調査対象 小学4年生～6年生 14学級435名(男子238名, 女子197名)

2-2 調査期間 2009年5月中旬～7月上旬

2-3 調査材料 研究1の15項目に加え、妥当性を高めるため「6. 私は、給食の時間を楽しみにしている。」, 「10. 私は、食べ物の好き嫌いをしない。」, 「14. 私は、運動するのが好きだ。」のダミー項目を挿入した。

2-4 教示および回答方法 研究1と同様であった。

2-5 手続き 担任教師から尺度を配布してもらい調査を実施した。

2-6 担任教師 14名(男性6名, 女性8名)

2-7 アンケート QOSL尺度の項目を担任教師用に改訂し、自分の担任している児童達が学校生活をどのように捉えているかを学級全体として捉え回答を求めた。また、気になる児童、問題を抱えていると思われる児童の出席番号をアンケート用紙に記入してもらい、記入された児童をノミネート群とした。

2-8 回答方法 児童用と同様に4件法で回答を求めた。

3. 結果および考察

3-1 QOSL尺度(最終版)の因子構造

QOSL尺度(最終版)の因子構造を明らかにするため、研究1と同様に統計ソフトSPSSを用いて探索的因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った。スクリープロットの形状から5因子構造が妥当と判断し、因子数を指定し再度同様の因子分析を行った。その結果、5因子15項目が抽出され、QOSL尺度(最終版)と決定した(Table3)。

3-2 QOSL尺度(最終版)の信頼性の検討(内的整合性, 折半法)

QOSL尺度の信頼性の検討を行うため、まずCronbachの α 係数を尺度全体で算出した結果、 $\alpha=.88$ といった比較的高い値を得ることができた。各因子では、研究1よりは多少低い結果となったが、高い値が得られた(FQ : $\alpha=.84$, CQ : $\alpha=.81$, SE : $\alpha=.78$, TQ : $\alpha=.75$, LQ : $\alpha=.77$)。さらに、折半法による信頼性を検討したところ、

Guttman 信頼係数は、高い値を得ることができた(全体=.91)。以上の結果から、QOSL 尺度は高い内的整合性を備えた尺度であるといえる。

Table3 QOSL尺度(最終版)の因子分析

項目 ($\alpha = .88$)	因子負荷量					共通性
I. 友人関係の質:FQ($\alpha = .84$)						
11. 私には、こままっているとき助けてくれる友だちがいる。	0.89	0.01	-0.01	-0.04	0.02	0.78
4. 私には、なやみを聞いてくれる友だちがいる。	0.81	-0.06	-0.01	0.08	-0.08	0.59
17. 私には、たよりになる友だちがいる。	0.69	0.12	-0.03	-0.06	0.08	0.59
II. 学級風土の質:CQ($\alpha = .81$)						
13. 私のクラスは、楽しい。	0.04	0.80	0.03	0.04	-0.03	0.72
7. 私のクラスは、明るい。	-0.01	0.76	-0.10	-0.02	0.04	0.55
1. 私のクラスは、過ごしやすい。	-0.01	0.72	0.06	0.00	-0.02	0.53
III. 自尊感情:SE($\alpha = .78$)						
3. 私は、だいたいのことは人よりうまくできると思う。	-0.02	-0.11	0.83	-0.03	-0.01	0.58
9. 私は、自分に自信がある。	0.00	0.05	0.71	0.03	0.02	0.58
16. 私は、役にたつ存在だと思う。	-0.02	0.08	0.66	-0.01	0.04	0.50
IV. 教師関係の質:TQ($\alpha = .75$)						
15. 私は、先生と一緒にいると安心する。	0.01	0.06	0.07	0.78	-0.06	0.68
8. 私は、先生と遊ぶと楽しい。	-0.08	0.00	-0.12	0.76	0.09	0.53
2. 私は、先生に何でも相談できる。	0.12	-0.06	0.12	0.54	0.01	0.42
V. 学習意欲の質:LQ($\alpha = .77$)						
5. 私は、授業で出された問題をしっかり考えている。	-0.11	0.07	0.06	-0.04	0.83	0.70
12. 私は、人が発表するときは集中して聞いている。	0.05	-0.06	-0.06	0.15	0.70	0.56
18. 私は、テストでいい点をとるために努力している。	0.16	-0.02	0.13	-0.05	0.49	0.43
固有値	5.86	1.65	1.33	1.06	1.03	
寄与率(%)	39.05	10.99	8.88	7.09	5.89	
因子間相関		I	II	III	IV	V
I	1					
II	0.58	1				
III	0.44	0.39	1			
IV	0.42	0.52	0.49	1		
V	0.55	0.56	0.64	0.55	1	

3-3 QOSL 尺度(最終版)の妥当性の検討(基準関連妥当性, 構成概念妥当性)

QOSL 尺度について、基準関連妥当性の検討を行うため、QOSL 尺度から得られた児童の平均得点と担任教師からのアンケート調査との相関をピアソンの相関係数を用いて因子別で求めた。その結果、CQ、TQ および FQ において、高い正の相関が示された(CQ : $r=.77, p<.01$, TQ : $r=.79, p<.01$, FQ : $r=.63, p<.01$)。また、LQ と SE では中程度の正の相関を確認することができた(LQ : $r=.49, p<.05$, SE : $r=.45, p<.05$)。松田・三宅・橋本(2007)は妥当性として相関を使用する場合においては信頼性とは異なり、 $r=.60$ でも高い妥当性があったと解釈できると述べている。つまり、 $r=.77\sim.45$ という結果は、QOSL 尺度がある程度の基準関連妥当性を有していることを確認できたと言える。

さらに、構成概念妥当性についてノミネート法により検討した。担任教師によって気になる児童、問題を抱えていると思われる児童としてノミネートされた児童をノミネート群、ノミネートされた児童以外を無作為に抽出した児童を統制群とし、対応のない t 検定を行った(Table4)。その結果、全ての因子において統制群よりもノミネート群の方が有意に低いということが明らかとなった(CQ : $t(102)=3.99, p<.01$, TQ : $t(102)=3.73, p<.01$, FQ : $t(102)=4.39, p<.01$, LQ : $t(102)=3.48, p<.01$, SE : $t(102)=3.26, p<.01$)。このことから、本尺度は児童の QOSL の程度を的確に捉えることができ、また、問題を抱えていると考えられる児童を弁別する機能を有しているといえる。

よって、構成概念妥当性を十分に備えている尺度であると考えられる。

Table4 群別によるQOSL尺度のt検定

	ノミネート群 (N=52)	統制群 (N=52)	t 値
学級風土の質:CQ	8.44 (2.81)	10.38 (2.11)	3.99**
教師関係の質:TQ	6.88 (2.38)	8.55 (2.08)	3.73**
友人関係の質:FQ	6.42 (2.71)	7.96 (2.06)	4.39**
学習意欲の質:LQ	7.87 (2.83)	9.90 (1.80)	3.48**
自尊心感情:SE	8.37 (3.16)	10.21 (2.15)	3.26**

**p<.01 *p<.05

総合考察

本研究では、小学生の学校生活全体を把握する概念としてQOSLに焦点をあて、研究1においてQOSL尺度を作成した。その結果、QOSL尺度はある程度の信頼性と妥当性を有していると考えられた。研究2では、研究1で作成したQOSL尺度の信頼性および妥当性を改めて検証し、内的整合性、基準関連妥当性、構成概念妥当性が確認された。本尺度は児童が学校生活のどの部分に課題を感じているかを評価できるため、学校生活において課題を抱える児童の発見も可能となり、児童に対する支援にも役立つと考えられる。またQOSL尺度では、いじめに関する項目などのネガティブな項目を扱っておらず、学校生活を肯定的に捉えているかどうか重点をおいているため、子どもが回答しやすいという利点があり、学校現場における利用が容易である。学校において児童の課題を見つけ、支援してくにあたり、QOSL尺度は有用な手掛かりを提供することができると考えられる。

今後の課題

本研究で作成したQOSL尺度は、内的整合性および折半法によって信頼性が確認されているが、再検査信頼性による検討は行われていない。さらに、基準関連妥当性を検討する際、通常は既存の尺度との相関によって検討することが多いが本研究では担任のアンケート結果から求めている。今後は、信頼性・妥当性が確認されている学校適応や自尊心感情の尺度を用いて、基準関連妥当性を改めて検証する必要もある。また、尺度の活用方法として、村田・清水・森(1996)によって求められている Depression Self Rating Scale (DSRS)のカットオフ値のように、QOSLの高低を判断するカットオフ値を設定することや、河村・田上(1997)が使用している群分けなどをQOSL尺度で行えるように改良することにより学校現場での活用場面も広がり、有用な情報を提供する手がかりになると考えられる。以上のことから、今後は、QOSL尺度の信頼性・妥当性について再度の検証と、QOSL尺度の学校現場での活用を考えた改良を念頭におき、研究を進めていく必要がある。

引用文献

- 福盛英明・峰松 修・馬場園 明・一宮 明・永野 純・藤野武彦・上園慶子(2001). 大学生のQOL研究: 大学生用QOL質問票「大学生生活チェックカタログ」の開発 CHAMPUS HEALTH, 37, 55-60.
- 船木智美・熊谷信順(2005). 小学生の無気力感と学校環境適応感との関係 山口大学教育学部附属教育実践総合

センター研究紀要, 19, 93-102.

古市裕一(2004). 小・中学生の学校生活享受感情尺度とその規定要因 岡山大学教育学部研究集録, 126, 29-34.

古市裕一・玉木弘之(1994). 学校の楽しさとその規定要因 岡山大学教育学部研究集録, 96, 105-113.

伊藤亜矢子・松井 仁(2001). 学級風土質問紙の作成 教育心理学研究, 49, 449-457.

仮谷園昭彦・西 耕治(2003). 児童の学校・教室イメージと学校適応との関連 鹿児島大学教育学部研究紀要, 54, 239-254.

粕谷貴志・河村茂雄(2002). 学校生活満足度尺度を用いた学校不適応のアセスメントと介入の視点 カウンセリング研究, 35, 116-123.

河村茂雄・田上不二夫(1997). いじめ被害・学級不適応児童発見尺度の作成 カウンセリング研究, 30, 112-120.

Magdalena M.C.Mok & Roderick P. McDonald(1994). Quality Of School Life: A scale to measure student experience or school climate? *Educational and Psychological Measurement*, 54, 483-495.

Malin Antero & Linnakyla Pirjo(2001). Multilevel Modelling in Repeated Measures of the Quality of Finnish School Life *Scandinavian journal of Educational Research*, 45, 146-166

松田文子・三宅幹子・橋本優花里(2007). わかって楽しい心理統計法入門: EXCEL, エクセル統計, ANOVA4 on the web 対応 北大路書房

文部科学省初等中等教育局児童生徒課(2007). 平成 19 年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査

村上博志(2004). 自己受容と関連する日常場面の要因についての研究: 大学生の QOL(QOSL)の視点から 九州大学心理学研究, 5, 257-262.

村田豊久・清水亜紀・森 陽二郎(1996). 学校における子どものうつ病: Birlerson の小児期うつ病スケールからの検討 最新精神医学, 1, 131-138.

表 三貴・繪内利啓・宮前義和(2008). 学校生活の質のチェックリスト(小学生版)の妥当性と信頼性に関する検討 香川大学教育実践総合研究, 1, 123-132.

嶋田洋徳(1998). 小中学生の心理的ストレスと学校不適応に関する研究 風間書房

庄司一子(1991). 社会的スキルの尺度の検討—信頼性・妥当性について— 教育相談研究, 29, 18-25.

田邊敏明・織田優子(2001). 小学生の保健室利用と学校生活適応および自己意識との関連 山口大学紀要, 3, 33-50.

田中宏二・高木 亮(2004). いじめ・不登校といった学校病理に対処するシステムのあり方に関する研究動向(1) 岡山大学教育学部研究集録, 126, 35-42.

谷 真弓・山崎勝之(2004). 児童用外的統制性質問紙(GEQC)の作成と信頼性, 妥当性の検討 パーソナリティ研究, 13, 1-10.

Williams T & Batten M. (1981). The Quality of School Life(ACER Research Monograph No. 12) Hawthorn Victoria *Australian Council for Education Research*.

山口豊一・飯田順子・石隈利紀(2005). 小学生の学校スキルに関する研究—学校生活スキル尺度(小学生版)の開発— 学校心理学研究, 5, 49-58.

Development of a Quality of School Life Scale for children

Asami Iba, Takehiro Tamaki and Mika Himachi

The purpose of this study was to develop the Quality of School Life Scale (QOSL) for children. The Participants of this study were 435 children (238 boys and 197 girls) from the 4th to the 6th grade in elementary schools.

Result of exploratory factor analysis revealed that the QOSL consisted of 15-items loading on five factors, which were named quality of classroom climate (CQ), quality of teacher relations (TQ), quality of relationships with friends (FQ), The quality of greediness for learning (LQ) and self-esteem (SE). Internal consistency of each factor was sufficiently high ($\alpha = .75 \sim .85$). And analysis of split-half reliability was high enough (Guttman coefficient of reliability = .91). Result of correlation analysis indicated that a significant correlation between teacher's score and the children's QOSL score ($r = .77 \sim .45$). Therefore it was shown that QOSL had criterion-related validity. Result of two sample t-test indicated nominated children showed significantly higher scores than controlled children in QOSL. Therefore it was shown that QOSL had concurrent validity. It was concluded that QOSL have high reliability and validity.

(指導教員：樋町美華)